

音 今 の 黒 崎 町 の

新聞からたどる黒崎の歴史 (五十三)

双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

戦後間もない昭和二十一年の夕飯に、アラの塩焼きや天ぷら、いかの甘露などビールも出された。

昔の相撲ファンに贈る 横綱双葉山の新潟巡業

県民がまだ敗戦のどん底にあえいでいた昭和二十一年七月二十日、あの相撲史に残る前人未到の六十九連勝という大記録をたてた、横綱双葉山が新潟巡業にきた。一行は来港後すぐに佐渡に渡り、二十一日と二十二日は両津市、二十三日は亀田町、二十四日は新潟市に巡業した。 ※注 双葉山は昭和二十一年一月に引退しているので、この新潟、佐渡の巡業は最後の引退興業である。

この名横綱が新潟へ来るのはこれが最後となる!!「もの憂い双葉山」の見出しの新聞記事から紹介する。

昭和二十一年七月二十日 記事

双葉山一行は二十日午前八時十五分来港、十一時佐渡に向かったが、佐渡汽船会社二階の休憩室に出航を待っているところを訪ねる。白のワイシャツにカーキのズボン、肥満した身体には新潟のこの暑さがこたえるらしく、卓上の水をつめた一升ビンが見る見る空になって行く。

見る見る空になっていくと、まだクーラーのないこの時代、新潟の暑さにまいていっている双葉山の様子が目に浮かぶようである。また、食糧事情のきびしい配給制のもと、腹をすかせた汽船の乗客たちが大きな味噌をつけたおにぎりを焼いたり、飯を炊いている下っぱのお相撲さんをうらやましそうにながめていると、当時の食糧難時代を偲ばせる記事であるが、それと同時に現役横綱を引退した淋しさと傷心の双葉山の姿が見られる。

そして、この日の記事の五日後、七月二十五日の新潟日報に、双葉山やお相撲さんたちの巡業の際の食事のことを、「双葉は何を召し上がる!!」と題して次のようなおもしろい記事が載っている。

今、新潟で最後の土俵をふんでいる双葉山、一体何を食べているのだろうか!!

本陣の新潟市西堀菊池屋旅館のお台所からこっそり覗いて見ると……これはまたなんと素晴らしい……まあそう焦らず

最後までゆっくり味はいながらお読みになってください。

お相撲さんのために市が配給した一日六合五勺分が勸進元から運びこまれており、朝は一合五勺、お昼は二合、夕飯は三合の割合だが、今のお相撲さんは可哀、特別に同情した菊池屋さんで、特別に赤飯を出したり、配給米を白米に化けさせて出したり、いろいろと苦労している。

二十四日双葉山は朝七時に起き、三十分間お経を読み八時に朝食、九時に場所に現れ、三時に帰宅、風呂で若い者にコスラレタリ、洗われたりしてあがるが、夕飯はアラの塩焼き、てんぷら、いかの甘露、一杯酢のもの、その他二膳つきに冷たいビールが添えてあり、その上、素晴らしいコンビーフの缶詰を携帯して、ちよいちよい口に運んでいる。こうして六合五勺の赤飯を平らげてから松竹館に出かけて行ったが、果たして椅子に納まったかどうか……。

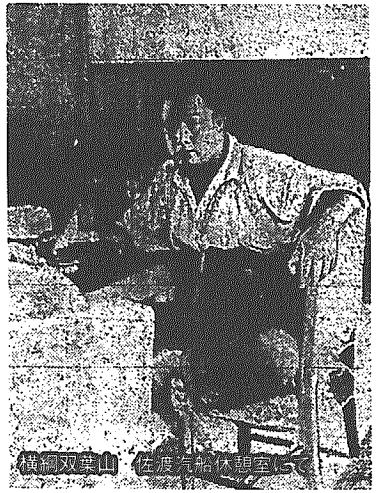
わが国の相撲史に輝く足かけ四年間連続六十九連勝の大偉業を達成した大横綱双葉山が新潟へ来た。それだけで当時は大ニュースだったに違いない。その双葉山の新潟での宿泊先、西堀通り四番町の菊池屋旅館の台所をこっそりと覗

いて、「双葉山は何をめしあがる」と題して、双葉山や外のお相撲さんたちの食べ物を紹介しようというのだから、あの身体の大きなお相撲さんたちが、食糧難のこの時代、一体何を食べているんだらうと、一般の人々の関心も深かったに違いない。

だから、これを取材した記者が、「まあ、そう焦らずに最後までゆっくり味わいながらお読みになって下さい」と書いているのもおもしろい。菊池屋旅館には、市から特配された力士一人に一日六合五勺の米が勸進元から運び込まれたとあるが、これは、当時の成人一日二合一勺の配給米(昭和二十年七月現在)からすると、まさに三倍以上の量である。

新潟の人が、食糧不足から唯一の足である電車に乗って近郊の農家へ闇米の買い出しに行っている。新潟の旧県庁前駅には、大勢の警察官が闇米の取り締まりに張っていた。そして、たとえ一升でももっていれば、法律名は分かったが、すぐに逮捕され、買ってきた米は没収、経済犯として処罰された。おそらくこのころ、一日二合一勺ほどの配給米だけしか食べないで生きていた人は一体どのくらいいたのだろうか。

こうした米事情のなか、お相撲さんたちは破格の優遇をされていたようである。さて、米問題は別として、双葉山の新潟来港を当時の新潟県民はどんなに喜んで迎えたことだらう。それほど人気があった。(続く)



平成九年五月一日発行(毎月一日発行)四〇五号 発行/黒崎町後場 千九五〇二二 新潟県西蒲原郡黒崎町大野二八四三 電話/〇五三七七三二〇一 編集/金田尚工課(担当 広報統計係) 印刷/小野塚印刷 経費一部六十五円